

# 政談十二社

泉鏡花

青空文庫



東京もはやここは多摩の里、郡の部に属する内藤新宿の町端まちはずれに、近頃新開で土の色赤く、日当ひあたりのいい冠木門かぶきもんから、目のふちほんのりと酔えいを帯びて、杖を小脇に、つかつかと出た一名の瀟洒しょうしゃたる人物がある。

黒の洋服で雪のような胸、手首、勿論靴で、どういう好みか目庇まびさしのつつと出た、鉄道の局員が被かぶるような形かたなのを、前さがりに頂いた。これにてらてらと小春の日の光を遮つて、やや蔭かげになつた頬骨ほおほねのちつと出た、目の大きい、鼻の隆たかい、背のすつくりした、人品に威厳のある年ねん齢ばい三十ばかりなるが、引ひき緊しまつた口に葉巻くわを啣くわえたままで、今門を出て、刈取つたあとの蕎麦そば畠はたけに面した。

この畠を前にして、門前の径こみちを右へ行ゆけば通とおり出て、停車場ステーションへは五町に足りない。左は、田舎道で、まず近いのが十二社じゅうにそう、堀ノ内つのはす、角筈つのはず、目黒などへ行ゆくのである。

見れば青物を市へ積出した荷車ひまが絶えては続き、街道を在所の方へ曳ひいて帰る。午後三時を過ぎて秋の日は暮れるに間もあるまいに、停車場ステーションの道には向わないで、かえつて十

二社の方へ靴の尖を廻らして、衝と杖を突出した。

しかもこの人は牛込南町辺に住居する法官である。去年まず検事補に叙せられたのが、今年になつて夏のはじめ、新に大審院の判事に任ぜられると直ぐに暑中休暇になつたが、暑さが厳しい年であつたため、瘦せるまでの煩いをしたために、院が開けてからも二月ばかり病氣びきをして、静に療養をしたので、このごろではすっかり全快、そこで届を出してやがて出勤をしようという。

ちようど日曜で、久しぶりの郊外散策、足固めかたがた新宿から歩行いて、十二社あたりまで行こうという途中、この新開に住んでいる給水工場の重役人に知合があつて立寄つたのであつた。

これから、名を由之助という小山判事は、埃も立たない秋の空は水のように澄渡つて、あちらこちら蕎麦の茎の西日の色、真赤な蕃椒が一団々ある中へ、口にしたその葉巻の紫の煙を軽く吹き乱しながら、田圃道を楽しそう。

その胸の中もまた察すべきものである。小山はもとより医者が厭だから文学を、文学も妙でない、法律を、政治をといった側の少年ではなかつた。

されば法官がその望で、就中希つた判事に志を得て、新たに、はじめて、その方は

……と神聖にして犯すべからざる天下控訴院の椅子にかかろうとする二三日。

足の運びにつれて目に映じて心に往来するものは、土橋でなく、流でなく、遠方の森でなく、工場の煙突でなく、路傍の藪でなく、寺の屋根でもなく、影でなく、日南でなく、土の凸凹でもなく、かえつて法廷を進退する公事訴訟人の風采、俯、伏目に我を仰ぎ見る囚人の顔、弁護士の額、原告の鼻、検事の髻、押丁等の服装、傍聴席の光線の工合などが、目を遮り、胸を蔽うて、年少判事はこの大なる責任のために、手も自由ならず、足の運びも重いばかり、光った靴の爪尖と、杖の端の輝く銀とを心すともなく直視めながら、一歩進み二歩行く内、にわかには凜と暗くなつて、風が身に染むので心着けば、樹蔭なる崖の腹から二頭の竜の、二条の氷柱を吐く末が百筋に乱れて、ドツと池へ灌ぐのは、熊野の野社の千歳経る杉の林を頂いた、十二社の滝の下路である。

二

「何か変つたこともないか。」と滝に臨んだ中二階の小座敷、欄干に凭れながら判事は徒然に茶店の婆さんに話しかける。

十二社あたりへ客の寄るのは、夏も極暑の節ひとさかり一盛とさかりで、やがて初冬にもなれば、上の社やしろうの森の中で狐が鳴こうという場所柄の、さびれさ加減思うべしで、建廻した茶屋やすみど休息やすみど所ころ、その節は、ビール聞し召せ枝豆も候だのが、ただ葦簀よしすの屋根と柱のみ、破やぶれの見える床の上へ、二ひら三ひら、申訳だけの緋ひの毛布けつとを敷いてある。その掛茶屋は、松と薄すすきで取廻し、大根畠を小高く見せた周囲五町ばかりの大池みきわの汀みぎわになっていて、緋鯉ひこいの影、真鯉まぎりの姿も小波さざなみの立つ中に美しく、こぼれ松葉の一筋二筋すべなるように水面を吹かれて渡るのも風情であるから、判事は最初、杖をここに留とどめて憩つたのであるが、眩まばゆいばかり西日が射さすので、頭痛持なれば眉ひそを顰ひそめ、水底みなそこへ深く入った鯉けつととともにその毛布けつとの席むしろを去つて、間あいに土間一ツ隔てたそれなる母屋の中二階に引越したのであった。

中二階といつてもただ段の数二ツ、一段低い処にお幾という婆さんが、塩煎餅せんべいの壺つぼと、駄菓子駄菓子の箱と熟柿じゆくしの笊ざるを横に控え、角火鉢おほきの大きいのに、真しん鍬ちゆうの薬罐やかんから湯気を立たせたのを前に置き、煤すすけた棚の上に古ぼけた麦酒ビールの瓶、心こころ太との皿などを乱雑に並べたのを背後うしろに背負い、柱に安煙草やすたばこのびらを張り、天井に捨団扇すてうちわをさして、ここまでさし入る日あたりに、眼鏡を掛けて継物ついでものをしている。外に姉さんも何なんも居にない、盛さかりの頃は本家から、女中料理人を引率して新宿停車場前ステエシヨンの池田屋という飲食店が夫婦づれ乗込むので、

ひとりみ 独自の便たよりないお幾婆よめさんは、その縁ゆかり続きのものと、留守番を兼ねて後生のほどをすま行い澄すという趣。

判事に浮世うきよばなしを促されたのを機しりにお幾はふと針の手を留めたが、返事より前さきに逸いちは疾やくその眼鏡を外した、進んで何か言いたいことでもあつたと見える、別の吸子きゆうすに沸たぎつた湯をさして、盆に乗せるとそれを持つて、前垂まえだれの糸屑いとくずを払いさま、静しずかに壇を上あつて、客の前に跪ひざまずいて、

「お茶を入替えて参りました、召上りまし。」といいながら膝ひざ近く躡にじり寄つて差置いた。判事は欄干らんかんについて頬を支えていた手を膝ひざに取つて、

「おお、それは難ありがと有う。」

と婆よめの目には、もの珍しく見ゆるまで、かかる紳士の優しい容よう子を心こころありげに瞻みまつたが、

「時に旦那様。」

「むむ、」

「まあ可哀おぼしめそうだと思召おぼしめし、この間お休み遊あそばしました時、ちよつと参りましたあの女おんなでございますが、御串戯ごしやうだんではございませうが、旦那様も佳いい女おんなだな、とおつしやつて下さいましたあのことでございませうがね、」

と言いかけてちよつと猶ためら予つて、聞く人の顔の色を窺うかがつたのは、こういつて客がこのことについて注意をするや否やを見ようとしたので。心にもかけないほどの者ならば話し出して退屈をさせるにも及ばぬことと、年寄だけに気が届いたので、案のごとく判事は聴く耳を立てたのである。

「おお、どうかしたか、本当に容子ようすの佳よい女こだよ。」

「はい、容子の可いい女こで。旦那様は都でいらつしやいます、別にお目にも留りますまいが、私わたくしどもの目からはまるでもう弁天様か小町かと思えますほどです。それに深切で優しいおとなしい女こでございまして、あれで一枚着飾かざらせませすれば、上うえつ方がたのお姫様と申しても宜いい位い。」

## 三

「ほほほ、賞ほめまするに税は立たず、これは柳橋も新橋も御存じでいらつしやいましょう、旦那様のお前で出まかせなことを失礼な。」

小山判事は苦笑をして、

「串 戯をいっては不可ん、私は学生だよ。」

「あら、あんなことをおっしゃって、貴方は何ぞの先生様でいらつしやいますよ。」

「まあその娘がどうしたというのだ。」と小山は胡坐をどっかりと組直した。

落着いて聞いてくれそうな様子を見て取り、婆さんは嬉しそうに、

「何にいたせ、ちつとでもお心に留つておりますなら可哀そうだと思つてやつて下さいまし。こうやつてお傍でお話をいたしますのは今日がはじめて。私どもへお休み下さいましたのはたつた二度なんでございますけれども、他に誰も居りませず、ちようどあの娘が来合せました時でよくお顔を存じておりますし、それにこう申してはいかがでございませう、旦那様もあの娘を覚えていらつしやいますように存じます。これも佳い娘だと思ひます。年寄の慾目、人ごとながら自惚でございませう、それで附かぬことをお話し申しますようではございますけれども旦那様、後生でございませう、可哀相だと思つてやつて下さりまし。」と繰返してまた言つた。かく可哀相だと思つてやれと、色に憂を帯びて同情を求めること三たびであるから、判事は思はず胸が騒いで幽に肉の動くのを覺えた。

向 島のうら枯さえ見に行く人もないのに、秋の末の十二社、それはよし、もの好として差措いても、小山にはまだ令室のないこと、並びに今も来る途中、朋友なる給水工場

の重役の宅で一盞すすめられて杯の遣取をする内に、娶るべき女房の身分に就いて、忠告と意見とが折合ず、血気の論とたしなめられながらも、耳朶を赤うするまでに、たといかなるものでも、社会の階級の何種に属する女でも乃公が気に入ったものをつい主張をして、華族でも、士族でも、町家の娘でも、令嬢でもたとい小間使でもと言ったことをここに断っておかねばならぬ。

何かしら絆が搦んでいるらしい、判事は、いづれ不祥のことと胸を——色も変ったよう、「どうかしたのかい、」と少しせき込んだが、という言葉に力が入った。

「煩っておりますので、」

「何、煩って、」

「はい、煩っておりますのでございますが。……」

「良い医者になけりや不可んよ。どんな病気だ、ここいらは田舎だから、」とつい通の人のただ口さきを合せる一応の挨拶のごときものではない。

婆さんも張合のあることと思入った形で、

「折入って旦那様に聞いてやって頂きたいので、委しく申上げませんと解りません、お可煩くなりましたら、面倒だとおっしゃって下さりまし、直ぐとお茶にいたしてしまいます

る。

あの娘は阿米およねといひましてちようど十八になります、親なしで、昨年きよねんの春までこうじ麴町まぢ十五丁目辺で、旦那様、榎のお医者といつて評判の漢方の先生、それが伯父御に当ります、その邸やしきで世話になつて育ちましたそうでございます。

門の屋根を突貫いた榎の大木が、大層名高いのでございますが、お医者はどういたしてかちつとも流行らないのでございましたッて。」

#### 四

「流行りません癖に因果と貴方あなたね、」と口もややなれなれ馴々なれなれしゆう、

「お米の容色きりようがまた評判でございまして、別嬪べつびんのお医者、榎の先生と、番町辺、津の守坂下かみざかしたあたりまでも皆みんなが言いいはやや囉らしましたけれども、一向にかかります病人がございません。

先生には奥様と男のお児こが二人、姪めいのお米、外見を張るだけに女中も居ようというのですもの、お苦しかろうではございせんか。

そこで、茨城の方の田舎とやらに病院を建てた人が、もつともらしい御容子を取柄に副院長にといい話がありましたそうで、早速家うちじゆう中それへ引越すことになりますと、お米さんでございませう。

世帯を片づけついでに、古い箆筒たんすのひとさお一棹も工面をするからどちらへか片附いたらと、体の可ていいままあ厄介えきかいに、その話がありました、あの娘も全く縁こ附く気はございませう、親身しんしんといつては他ほかになし、山の奥へでも一所にといいたい処を、それは遣やりくり繰の様子も知つておりますことなり、まだ嫁入はいたしたくございませう、我わがまま儘を申しますようで恐入りますけれども、奉公がしとうございませうと、まあこういうので。

伯父御の方はどのみち足手まといさえなくなれば可いいのでございませうよ、売れば五両にもなる箆筒へんとうだつてお米につけなすむことですから、二ツ返事で吞込みました。

あの容きりよう色で家の仇名あだなにさえなつた娘こを、親身を突放したと思えば薄情でございませうが、切ない中を当節柄、かえつてお堅い潔白なことではございませうかね、旦那様。

漢方の先生だけに仕込んだ行儀もございませう。ちようど可いい口があつて住込みましたのが、唯ただいま今居ります、ついこの先のお邸で、お米は小間使をして、それから手が利きますので、お針もしておりますのでございませうよ。」

「誰の邸だね。」

「はい、沢井さんといって旦那様は台湾のお役人だそうで、始終あつちへお詰め遊ばず、お留守は奥様、お老人はございませませんが、余程の御大身だと申すことで、奉公人も他に大勢、男衆も居ります。お嬢様がお一方、お米さんが附きましてはちよいちよいこの池の緋鯉や目高に麩を遣りにいらつしやいますが、ここらの者はみんな姫様々々と申しますよ。」

奥様のお顔も存じております、私がついお米と馴染になりましたので、お邸の前を通りますれば折節お台所口へ寄りましては顔を見て帰りますが、お米の方でも私どものようなものを、どう間違えたかお婆さんお婆さんと、一人懐いのにまた格別に慕ってくれますので、どうやら他人とは思えません。」

婆さんはこの時、滝登の懸物、柱かけの生花、月並の発句を書きつけた額などを静にみたから、判事も釣込まれてなぜとはなくあたりを眺めた。

向直つて顔を見合せ、

「この家は旦那様、停車場前に旅籠屋をいたしております、甥のものでも私はまあその厄介でございます。夏この滝の繁昌な時分はかえつて貴方、邪魔もので本宅の方へ参

つております、秋からはこうやつて棄てられたも同然、私も姨捨山に居ります氣で巢守をしますのでございましてね、いいえ、愚痴なことを申上げますものではございせんが、お米もそこを不便だと思つてくれますか、間を見てはちよこちよこと駆けて来て、袂からの、小風呂敷からだの、好きなものを出して養つてくれます深切さ、」としめやかに語つて、老の目は早や涙。

## 五

密と、筒袖になつてゐる襦袢の端で目を拭い、

「それでございますから一日でも顔を見せんと寂しくつてなりません、そういうことになつてみますると、役者だつて鼻肩なものには可い役がさしてみとうございましょう、立派な服装がさせてみとうございましょう。ああ、叶屋の二階で田之助を呼んだ時、その男衆にやつた一包の祝儀があつたら、あのいじらしい娘に褌の揃つたのが着せられますよものなぞと、愚痴も出ます。唯今の姿を罰だと思つて罪滅しに懺悔ばなしもいいます。私もこう申してはお恥かしゆうございしますが、昔からこうばかりでもございませぬ、それ

もこれも皆みんななり行ゆきだと断念あきらめましても、断念あきらめられませんかのお米の身の上。

二三日顔を見せませんから案じられます、逢あいとうはございます、辛抱がし切れませんでちよつと沢井様のお勝手へ伺うかがいますと、何あなた貴方、お米は無事で、奥様も珍しいほど御機嫌ごきげんのいい処、竹屋の婆さんが来たが、米や、こちらへお通し、とおっしゃると、あの娘こもいそいそ、連れられて上りました。このごろ客が立て込んだが、今日は誰も来ず、天気は可よし、早咲の菊を見ながらちようどお八ツ時分と、お茶お菓子を下くださいまして、私わたくし風情へいろいろと浮世話。

お米も嬉しそうに傍そばについてくれますなり、私はまるで貴方、嫁にやった先の姑しゅうとに里の親が優しくされますような気で、ほくほくものでおりました。

何、米にかねがね聞きいている、婆さんお前は心こころ懸かけの良いいものだというから、滅多に人にも話はなされない事だけれども、見せて上げよう。黄金きんが肌きに着きいていると、霧が身のまわり六尺だけは除よけるとまでいうのだよ、とおっしゃってね。

貴方五百円。

台湾の旦那から送おくつて来て、ちようどその朝銀行で請取しんしゆつておいでなすつたという、ズッシリと重いのが百円ずつで都合五枚。

お手箆笥の抽斗ひきだしから厚紙に包んだのをお出しなすって、私に頂かして下さいました。両手に据えて拝見をいたしました。何と申上げようもございませぬ。ただへいへいと申上げますと、どうだね、近頃出来たばかり、年号も今年のだよ、そういうのは昔だつて見た事はあるまい、また見ようたつて見せられないのだから、ゆつくり御覽、正直な年寄だというから内証で拝ませるのだよ。米や茶をさしておやり、と莞爾にこついておいで遊ばす。へへ、」と婆さんは薄うすわらい笑わらいをした。

判事は眉を顰ひそめたのである、片腹痛さもかくのごときは沢山あるまい。

婆さんは額の皺しわを手で擦さすり、

「はや実まことにお情深い、もつとも赤十字とやらのお顔かおきき利と申すこと、丸顔で、小造こづくりに、肥ふとつておいで遊ばす、血の気の多い方、髪をいつも西洋風にお結びなすって、貴方、その時なんぞは銀行からお帰りそうそく々さと見えまして、白襟で小紋のお召を二枚も襲かさねていらつしやいまして、早口で弁舌さわやかの爽さわやかな、ちよこまかにあれこれあれこれ、始終こきざみ小刻こきざみに体を動かし通し、氣はたらきの働はたらきのあらつしやるのは格別でございませぬ、且那樣。」と上目づかい。

判事は黙つてうなずいた。

婆さんは唾つをのんで、

「お米はいつもお情ない方だとばかり申しませんが、それは貴方、女中達の箸の上げおろしにも、いやあだのこうだのおつしやるのも、欲いだけ食べて胃袋を悪くしないようにという御深切でございませうけれども、私は胃袋へ入ることよりは、腑に落ちぬことがあるでございますよ。」

## 六

「昨年きよねんのことで、妙にまたいとこはとこが擲からみますが、これから新宿の汽車や大久保、板橋を越しまして、赤羽へ参ります、赤羽の停車場ステーションから四人詰づめばかりの小さい馬車が往復わいふくします。岩淵いわぶちの渡場わたしば手前に、姉の悴せがれが、女房持で水吞百姓をいたしておりまして、しがない身みのうえ上ではありますけれど、氣立の可い深切ものでございませうから、私も当あてにはしないで心頼りと思っております。それへ久しぶりぶさたで不沙汰見舞に参りますと、狭い処へ一晩泊めてくねまして、翌あくるひ日おひる過ぎ帰りがけに、貴方、納屋のわきにございませう柿を取って、土産を持って行きました風呂敷にそれを包んで、おばさん、詰らねえものを重くツても、持つて行ツとくんせえ。そのかわり私が志で、ここへわざと端はしたせに錢せんをこ

う勘定して置きます、これでどうぞ腰の痛くねえ汽車の中等へ乗って、と割って出しましただけに心持が嬉しゆうございましょう。勿体ないがそれでは乗ろうよ。ああ、おばさん御機嫌ようと、女房も深切な。

二人とも野良へ出がけ、それではお見送はしませんからと、跣足のまま並んで門へ立つて見ております。岩淵から引返して停車場へ来ますと、やがて新宿行のを売出します、それからこの服装で気恥かしくもなく、切符を買ったのでございしますが、一等二等は売出す口も違いますね、旦那様。

人ごみの処をおしもおされもせず、これも夫婦の深切と、嬉しいにつけて気が勇みますので、臆面もなく別の待合へ入りましたが、誰も居りません、あすこはまた一倍立派でございませぬ、西洋の緞子みたような綾で張詰めました、腰をかけますとふわりと沈んで、爪尖がポンとこう、「

婆さんは手を揃えて横の方で軽く払き、

「刎上りますようなのに控え込んで、どうまた度胸が据りましたものか澄しております処へ、ばらばらと貴方、四五人入っただけでなすったのが、その沢井様の奥様の御同勢でございまして。」

いきなり卓子テエブルの上へシヨオルだの、信玄袋だのがどきどきと並びますと、連つれの若い男の方が鉄砲をどしりとお乗せなすつた。銃つづくち口わたくしが私の胸の処へ向きましたものでございませうから、飛上つて旦那様、目もくらみながらお辞儀をいたしますと、奥様のお声で、

おやお婆さん、ここは上等の待合室なんだよ、とどうでしょう……こうでございませう。

人の胃袋の加減や腹工合はどうであろうと、私が腑ふに落ちないと申しますのはここなんでございますが、その時はただもう冷汗びツしより、穴へでも入りたい気になりまして、しおしお片隅の氷のような腰掛へ下りました。

後おくれば馳おくれせにつかつかと小走こばしりに入りましたのが、やっぱりお供の中うちだったと見えます、あのお米で。

卓子を取巻きまして御一家ごいっけがずらりと、お米が姫様ひいさまと向う正面にあいている自分の坐る処へ坐らないで、おや、あなたあいておりますよ、もし、こちらへお懸けなさいませう、冷えますから、と旦那様。」

婆さんはまた涙なみだぐ含んで、

「袂たもとから出した手巾ハンケチを、何とそのまま結構な椅子つかまに拵りながら、人込ほこりの塵埃ほこりもあろうと払はたいてくれましたらうではございませんか、私が、あの娘こに知己ちかづきになりましたのはその

時でございました。」

待て、判事がお米を見たのもまたそれがはじめてであった。

七

婆さんは過日己が茶店にこの紳士の休んだ折、不意にお米が来合せたことばかりを知っているが——知らずやその時、同一赤羽の停車場に、沢井の一行が卓子を輪に囲んだのを、遠く離れ、帽子を目深に、外套の襟を立てて、件の紫の煙を吹きながら、目ばかり出したその清い目で、一場の光景を屹と瞻っていたことを。——されば婆さんは今その事について何にも言わなかったが、実はこの媼、お米に椅子を払って招じられると、帯の間からぬいと青切符をわざとらしく拔出して手に持ちながら、勿体ない私風情がといいいい貴夫人の一行をじろりとし、躡り寄って、お米が背後に立った前の処、すなわち旧の椅子に直つて、そして手を合せて小間使を拜んだので、一行が白け渡つたのまで見て知っている位であるから、この間のこの茶店における会合は、娘と婆さんとは不意に顔の合っただけであるけれども、判事に取つては蓋し不思議のめぐりあいであった。

かく停車場ステーションにお幾が演じた喜劇を知っている判事には、婆さんの昔の栄華も、俳優やくしやを茶屋の二階へ呼びなどしたことがある様子も、この寂寞せきぱくの境に堪え得て一人で秋冬を送るのも、全体を通じて思い合さるる事ばかりであるが、可よし、それもこれも判事がお米に対する心の秘密とともに胸に秘めて何事も謂いわず、ただ憂慮きつかわしいのは女の身の上、聞きたいのは婆ばばが金貨を頂かせられて、——

「それから、お前がその金子かねを見せてもらうと、」  
促して尋ねると、意外千万、

「そのお金が五百円、その晩お手箆筒てだんすの抽斗ひきだしから出してお使いなさろうとするとすっかり紛失をしていたのでございます、」と句切つて、判事の顔を見て婆さんは溜息ためいきを吐ついたが、小山も驚いたのである。

赤羽停車場ステーションの婆さんの挙動と金貨を頂かせた奥方の所為しわざとは不言不語いわずかたらずの内に線を引き、それがお米の身に結ばれるというような事でもあるだろうと、聞きながら推したに、五百円が失うせたというのはいがけない極きわみであった。

「ええ、すっかり紛失？」と判事も屹きつと目を瞠みはつたが、この人々はその意気において、五という数すうが、百となつて、円とあるのに慌てるような風ではない。

「まあどうしたというのでございますか、抽斗にお了しまいなすつたのは私もその時見ておりましたのに、こりや聞いてさえ吃驚びつくりいたしますものお邸では大騒ぎ。女などは髪切かみぎれの化物が飛び込んだように上を下、くるくる舞うやらぶつかるやら、お米なども蒼くなつて飛んで参つて、私にその話をして行きましたつけ。

さあ二日経たつても三日経つても解りますまい、貴夫人とも謂われるものが、内からも外からも自分の家のことに就いて罪人は出したくないとおっしゃつて、表沙汰にはなりません、とにかく、不取締でございますから、旦那に申訳がないとのことで大層御心配、お見舞に伺いまする出入のものに、纒わすかばかりだけれども纒ばかりだけれどもと念をお入れなすつちやあ、その御吹聴ごふいちようで。

そういたしますとね、日頃お出入の大八百屋の亭主で佐助と申しまして、平生は奉公人大勢に荷を担がせて廻らせて、自分は帳場に坐つていて四ツ谷切つて手広く行やつておりまするのが、わざわざお邸へ出て参りまして、奥様に勧めました。さあこれが旦那様、目黒堀ノ内、渋谷、大久保、この目黒辺あたりをかけて徘徊はいかいをいたします、真夜中には誰とも知らず空のものと談話はなしをしますという、鼻の大きな、爺じいの化精ばけものでございます。

「旦那様、この辺をお通り遊ばしたことがございますなら、田舎道などでお見懸けなさりはしませんか。もし、御覧ごらんじましたら、ただ鼻とこう申せば、お分りになりますでございましょう。」

判事はちよつと口を挟んで、

「鼻、何鼻の大きい老人、」

「御覧じやりましたかね。」

「むむ、過日いっか来る時奇代な人間が居ると思つたが、それか。」

「それでございますとも。」

「お待ち、ちようどあすこだ、」と判事は胸を斜めに振返つて、欄干てすりに肱ひじを懸けると、滝の下道が三ツばかり畝うねつて葉の蔭に入る。一叢ひとむらの藪やぶを指した。

「あの藪を出て、少し行つた路傍みちばたの日当ひあたりの可よい処に植木屋の木戸とも思うのがある。」

「はい、植吉でございます。」

「そうか、その木戸の前に、どこか四ツ谷辺の縁日へでも持出すと見えて、女郎花おみなえしだの、

桔梗、竜胆だの、何、大したものはない、ほんの草物ばかり、それはそれは綺麗に咲いたのを積んだまま置いてあった。

私はこう下を向いて来かかったが、目の前をちよろちよろと小蛇が一条、彼岸過だつたに、ぽかぽか暖かかったせいか、植木屋の生垣の下から道を横に切つて畠の草の中へ入つた。大嫌だから身震をして立留つたが、また歩行き出そうとして見ると、蛇よりもつとお前心持の悪いものが居たろうではないか。

それが爺よ。

綿を厚く入れた薄汚れた棒縞の広袖を着て、日に向けて背を円くしていたが、なりの低い事。草色の股引を穿いて藁草履で立っている、顔が荷車の上あたり、顔といえは顔だが、成程鼻といえは鼻が。」

「でございましょうね、旦那様。」

「高いんじゃないな、あれは希代だ。一体馬面で顔も胴位あろう、白い髻が針を刻んでなすりつけたように生えている、頤といったら臍の下に届いて、その腮の処まで垂下つて、口へ押冠さつた鼻の尖はぜんまいのように巻いているじゃあないか。薄紅く色についてその癖筋が通つちやあいないな。目はしよぼしよぼして眉が薄い、腰が曲つて大儀

そうに、船頭が持つ櫂かいのような握にぎりぶと 太な、短い杖をな、唇へあてて手をその上へ重ねて、あれじゃあ持もちおも 重りがするだろう、鼻を乗せて、気だるそうな、退屈らしい、呼吸いきづかいも切なそうで、病後やみあがり見たような、およそ何だ、身体中の精分からだが不のこらず 残集つて熟したような鼻ツつきだ。そして背を屈かがめて立った処は、鴻こうの鳥が寝ているとしか思われぬ。」

「ええ、もう傘からかさのお化がとんぼを切った形なんでございますよ。」

「芬ぶんとえた村へ入ったような臭においがする、その爺じい、余り日南ひなたぼっこを仕過ぎて逆のぼ上せたと思われる、大きな真しんちゆう 鍬くわの耳みみかき 搔かきを持って、片手で鼻に杖をついたなり、馬面ばめんを据すえておいて、耳の穴を搔かきはじめた。」

「あれは癖くせでございまして、どんな時でも耳搔かきを放はなしましたことはないのでございます。」

「余り希代きだいだから、はてな、これは植木屋の荷にじやあなくツて、どこへか小屋こやがけをする飾かざりにつかう鉢はちうえ物で、この爺おやは見世物みせものの種くさねかしらん、といやな香においを手でおさえて見ていると、爺おやがな、クツクツクツとい出でした。

恐おそしい鼻呼吸はないきじやあないか、荷車にに積たんだ植木鉢はちの中に突つ込こむようにして桔梗ききやうを嗅かぐのよ。

風流ふうりゆう気はないが秋草あきくさが可哀あはれそうで見みていられない。私は見返みかえりもしないで、さつさとこ

つちへ通抜けて来たんだが、何だあれは。」といいながらも判事は眉根を寄せたのである。「お聞きなさいまし旦那様、その爺のためにお米が飛んだことになりました。」

## 九

「まずあれは易者なんで、佐助めが奥様に勧めましたのでございます、鼻はトをいたしません。」

「トを。」

「はい、トをいたしますが、旦那様、あの筮ぜいちく竹を読んで算木を並べます、ああいうのはございませぬ。二三度何とかいう新聞にも大騒ぎを遣つて書きました。耶蘇ヤソの方でむずかしい、予言者とか何とか申しますとのこと、やつぱり活如来いきによらい様が千年のあとまでお見通しで、あれはああ、これはこうと御存じでいらつしやるといったようなものでございませぬとさ。」

真顔で言うのを聞きながら、判事は二ツばかり握にぎりこぶし拳を横にして火鉢の縁ふちを軽くおき圧えて、確めるがごとく、

「あの鼻が、活如来？」

「いいえ、その新聞には予言者、どういふことか私には解りませんが、そう申して出しましたそうで。何しろ貴方、先の二十七年八年の日清戦争の時なんぞ、はじめからしまいで、昨日はどこそこの城が取れた、今日は可恐しい軍艦を沈めた、明日は雪の中で大戦がある、もつともこつちがたが勝じや喜びなさい、いや、あと二三ヶ月で鎮るが、やがて台湾が日本のものになるなどと、一々申す事がみんな中りまして、号外より前に整然と心得ているくらいは愚な事。ああ今頃は清軍の地雷火を犬が嗅ぎつけて前足で掘出しているわの、あれ、見さい、軍艦の帆柱へ鷹が留った、めでたいと、何とその戦に支那へ行つておいでなさるお方々の、親子でも奥様でも夢にも解らぬことを手に取るように知っていたという吹聴ではございませんか。

それも道理、その老人は、年紀十八九の時分から一時、この世の中から行方が知れなくなつて、今までの間、甲州の山続き白雲という峰に閉籠つて、人足の絶えた処で、行い澄して、影も形もないものと自由自在に談が出来るようになった、実に希代な予言者だと、その山の形容などというものはまるで大薩摩のように書きました。

その鼻がああ爺なんぞございましてね。

はい、いえ、さようでございます、旦那様も新聞で御存じでも、あの爺のことは思召しますまいよ。ちつとも鼻の大きなことは書いてないのだそうでございますから。

もつとも鐘しょうき 魘おび様がお笑い遊ばしちやあ、鬼おにが恐こわがりはいたしますまい、私どもが申せば活如来、新聞屋さんがおつしやればその予言者、活如来様や予言者殿の、その鼻ツつきがああだとあつては、根ねツから難ありがたみ有味あじがございませぬもの、売ものに咲いた花でございましょう。

その瘴雲霧が立籠めて、昼も真ま暗くらだといいました、甲州街道のその峰と申しますが、今でも爺さんが時々お籠こもりをするという庵いおりがございますつて。そこは貴方、府中の鎮守様の裏手でございまして、手が届きそうな小さな丘かみななでございますよ。もつとも何千年の昔から人足の絶えた処には違いございませぬ、何蔵わらびでも生えてりや小児こどもが取りに入りましたよ。うけれども、御覧じやりますし、お茶の水の向うの崖がきだつて仙台様お堀割の昔から誰も足踏をした者はございませぬや。日蔭はどこだつて朝から暗うございします、どうせあんな萌もやしの糸瓜へちまのような大きな鼻の生えます処でございしますもの、うっかり入ろうものなら、蚯みみずの天上するのに出ツくわして、目をまわしませんければなりません。と、何か激したことのあるらしく婆おばさんはまくしかけた。

一息つき言葉をつぎ、

「第一、その日清戦争のことを見透して、何か自分が山の祠の扉を開けて、神様のお馬の轡を取つて、跣足で宙を駈出して、旅順口にわたりやあお手伝でもして来たように申しますが、ちつとも戦のあつた最中に、そんなことが解つたものではございません。ようよう一昨年から去年あたりへかけて騒ぎ出したのでございますもの、疑つてみました日には、当になりはいたしません。しかしまあ何でございますね、前触が皆勝つことばかりでそれが事実なんですから結構で、私などもその話を聞きました当座は、もうもう貴方。」

と黙つて聞いていた判事に強請るがごとく、

「お可煩くはいらつしやいませんか、」

「悉しく聞こうよ。」

判事は倦める色もあらず、お幾はいそいそして、

「ええどうぞ。条を申しませんと解りません。私どもは以前、ただ戦争のことにつきまし

てあれが御祈禱ごきととうをしたり、お籠こもり、断食などをしたという事を聞きました時は、難有ありがたい人だと思ひまして、あんな鼻附でも何となく尊いもののように存じましたけれども、今度のお米のことで、すっかり敵対むこうになりました、憎らしくツて、癩しやくに障さつてならないのでございます。

あんなものということが当になんぞなりますものか。トもくだらないもあつたもんじゃあございませぬ。

でございませぬが、難有ありがたみ味はなくツても信仰はしませんでも、厭いやな奴は厭いやな奴で、私がこう悪あつこ口を申しますのを、形は見えませんがどこかで聞いていて、仇あだをしまいかと思ひますほど、気味の悪い爺じいなんでございまして、「

といいながら日暮際のはつと明あかるい、艶つやのないぼやけた下なる納戸に、自分が座の、人なき薄汚れた座蒲団のあたりを見て、婆うしろうさんは後見らるる風情であつたが、声を低うし、

「全体あの爺は甲州街道で、小商人こあきんど、煮売屋ともつかず、茶屋ともつかず、駄菓子だの柿だの饅頭まんじゅうだのを商ひまする内の隠居でございまして、私ども子供の内から親どもの話に聞いておりましたが、何でも十六七の小僧の時分、神隠しか、攫さらわれたか、行方知れずになつたんですつて。見えなくなつた日を命日めいじつにしている位でございましてそうですが、

七年ばかり経ちましてから、ふいと内の者に姿を見せたと申しますよ。

それもね、旦那様、まともに帰つて来たものではありません。破風を開けて顔ばかり出しましたとき、厭じやありませんか、正丑の刻だったと申します、」と婆さんは肩をすぼめ、

「しかも降続きました五月雨のことで、攫われて参りましたと同一夜だと申しますが、皺枯れた声をして、

（家 中無事か、）といったそうでございますよ。見ると、真暗な破風の間から、ぼやけた鼻が覗いていまいしょうではございせんか。

皆、手も足も縮んでしまひましたろう、縛りつけられたようになりましたそうでございしますが、まだその親が居りました時分、魔道へ入つた児でも鼻を嘗めたいほど可愛かつたと申します。

（悴 まあ、）と父親が寄ろうとしますと、変な声を出して、

寄らつしやるな、しばらく人間とは交らぬ、と払い退けるようにしてそれから一式の恩返しだといって、その時、饅頭の餡の製し方を教えて、屋根からまた行方が解らなくなつたと申しますが、それからはその島屋の饅頭といつて街道名代の名物でございます。」

## 十一

「在り来りの皮は、麩末な麦の香のする田舎饅頭なんです、その餡の工合がまた格別、何とも申されません旨さ加減、それに幾日置きましても干からびず、味は変わりませんが評判で、売れますこと売れますこと。」

近在は申すまでもなく、府中八王子辺までもお土産折詰になりますわ。三鷹村深大寺、桜井、駒返し、結構お茶うけはこれに限る、と東京のお客様にも自慢をするようになりましたでしょう。

三年と五年の中にはめきめきと身上を仕出しまして、家は建て増します、座敷は拵えます、通庭の両方には入込でお客が一杯という勢、とうとう蔵の二戸前も拵えて、初はほんのもう屋台店で渋茶を汲出しておりましたのが俄分限。

七年目に一度顔を見せましてから毎年五月雨のその晩には、きつと一度ずつ破風から覗きまして、

（家中無事か。）おお、厭だ！と寂しげに笑ってお幾婆さんは身顫をした。

「その中親うちが亡なくなつて代がかわりました。三人の兄弟で、仁右衛門と申しますあの鼻は、一番の惣領、二番目があとを取ります筈はずの処、これは厭いやじゃと家出をして坊さんになりました。」

そこで三蔵と申しまする、末が家うちへ坐りましたが、街道一の家繁昌、どういたして早やただの三蔵じゃあございません、寄合にも上席で、三蔵旦那でございませぬ。

誰のお庇かげだ、これも兄者人あにじやひとの御守護のせい何ぞ恩返しを、と神様あつかい、伏拝みましてね、」

と婆たなさんは掌なそこを合せて見せ、

「二年ある、やつぱりその五月雨の晩に破風から鼻を出した処で、（何ぞお望のぞみのものを）と申上げますと、（ただ据えておけば可い、女房を一人、）とそういったさうでございませぬ。」

「ふむ、」

「まあ、お聞き遊ばせ、こうなんでございませぬよ。」

それから何事を差置いても探しますと、ございませぬ。来るものも一生奉公の気なら、島屋でも飼殺しのつもり、それが年寄でも不具かたわでもございませぬ。

（色の白い、美しいのがいいいいい。）

と異な声で、破風口から食好みを遊ばすので、十八になるのを伴れて参りました、一番目の嫁様は来た晩から呻うめいて、泣煩うて貴方、三月日には瘦やせ衰おとろえて死んでしまいました。

その次のも時々悲鳴を上げましたそうですが、二年経たつてやつぱり骨と皮になつて、可哀そうにこれもいけません。

さあ来るものも来るものも、一年たつか二年持つか、五年とこたえたものは居りませんで、九人までなくなつたのでございます。

あるに任して金子かねも出したではございましょうが、よくまあ、世間は広くツて八人の九人のと目鼻のある、手足のある、胴のある、髪かみの黒い、色の白い女があつたものだと思ひますのでございますよ。十人目に十三年生きていたという評判おんなの婦人が一人、それは私わたくしもあの辺に参りました時、饅頭まんじゅうを買いに寄りましたと見ましたつけ。

大柄おんなな婦人で、鼻筋はなすねの通つた、佳いい容きりよう色、少し凄すこいような風かぜツつき、乱みだれ髪がみに浅葱あさぎの願はら巻まきを《し》めまして病人と見えましたが、奥おくの炉ろのふちに立膝たちかまをしてだらしなく、こう額かぶに長煙管ながえんくわんをついて、骨ほねが抜けたように、がっくり俯うつむ向むいておりましたが。」

「百姓家の納戸の薄暗い中に、毛筋の乱れました頸えりあし、脚あしなんざ、雪のようで、それがあの、客だと見て真ま蒼つさおな顔でこつちを向きましたのを、今でも私わたくしは忘れません。可哀そうにそれから二年目にととう亡なくになりましたが、これは府中に居た女郎上りを買って来て置いたのだと申します。

もうその以前から評判が立っておりましたので、山と積まれてからが金子かねで生命いのちまでは売りませんや、誰も島屋の隠居には片づき人てがなかつたので、どういふものでもございませうか、その癖、そうやって、嫁よめが極きまりましたも女房が居ましても、家へ顔を出しますのはやつぱり破風はふから毎年その月のその日の夜中、ちようど入梅つゆの真中まんなかだと申します、入梅から勘定して隠居が来たあとをちようど同一おんなじように指を折ると、大抵梅雨あけだと噂うわさがあったのでございまして。

実際、おかみさんが出来るようになりましてからも参るのは確たしかに年に一度でございまして、それとも日に三度ずつも来ましたか、そこどこはたしかなことは解りません。

何にいたしましても、来るものも娶とるものも亡なくくなりましたのは、こりや葬式とむらいが出ま

したから事実<sup>まったく</sup>なんで。

さあ、どんづまりのその女郎が殺されましてからは、怪我にもゆき人が<sup>て</sup>ございません、これはまた無いはずでございましょう。

そうすると一年、二年、三年と、段々店が寂れまして、家も蔵も旧<sup>もと</sup>のようではなくなりました。一時は買込んだ田地<sup>でんじ</sup>なども売物に出たとかいう評判でございました。

そういういたします内に、さよう、一昨年でございましたよ、島屋の隠居<sup>うち</sup>が家へ帰ったということを知りましたのは。それから戦争の祈禱の評判、ひとしきりは女房一件で、饅頭の餡でさえ胸を悪くしたのも、そのお国のために断食をした、お籠<sup>こもり</sup>をした、千里のさき三年のあとのあとまで見通しだと、人気といつちやあおかしく聞えますが、また隠居殿の曲つた鼻が素直<sup>まつすぐ</sup>になりました、新聞にまで出ます騒ぎ。予言者だ、と旦那様、活<sup>いきに</sup>如来<sup>よらい</sup>の扱<sup>あつかい</sup>でございましょう。

ああ、やれやれ、家へ帰つてもあの年紀<sup>とし</sup>で毎晩々々機織<sup>はたおり</sup>の透見<sup>はりみせ</sup>をしたり、糸取場を覗<sup>のぞ</sup>いたり、のそりのそり這<sup>は</sup>うようにして歩行<sup>ある</sup>いちや、五宿の宿場女郎の張店<sup>はりみせ</sup>を両側ね、糸をかかりますように一軒々々格子戸の中へ鼻を突<sup>つっこ</sup>込んだあクンクン嗅<sup>か</sup>いで歩行<sup>ある</sup>くの御存じないか、と内々私はちつと聞いたことがございますので、そう思っておりましたが、

善くは思いませんばかりでも、お肚なかのことを嗅ぎつけられて、変な杖でのろわれたら、どんな目に逢おうも知れぬと、薄気味の悪い爺じいなでございます。

それが貴方、以前からお米を貴方。」

と少し言洩りながら、

「跟つけつ廻つしてしているのでございます。」と思切つた風でいったのである。

「何、お米を、あれが、」と判事は口早にいつて、膝を立てた。

「いいえ、あの、これと定つたこともございません、ございませぬようなものの、ふらふら堀ノ内様の近辺、五宿あたり、夜更よふけでも行きあたりばつたりにうろついて、この辺へはめつたに寄りつきませなんだのが、沢井様へお米が参りました、ここでもまた、容色きりようが評判になりました時分から、藪やぶからでも垣からでも、ひよいと出ちやああの女の行ゆくさきを跟つけるのでございます。薄ぼんやりどこにかあの爺おやが立たつてるのを見つけましたものが、もしその歩き出しますのを待つておりますれば、きつとお米の姿が道に見えると申したようなわけでございまして。」

「おなじ奉公人どもが、たださえ口の悪い処へ、大事出<sup>しゅつ</sup>来<sup>たい</sup>のように言い囃<sup>は</sup>して、からかい半分、お米さんは神様のお気に入った、いまに緋<sup>ひ</sup>の袴<sup>はかま</sup>をお穿<sup>は</sup>きだよ、なんてね。

まさかに気があるうなどは、怪我にも思うのじやございませぬが、串<sup>じょう</sup>戯<sup>だん</sup>をいわれるばかりでも、癩<sup>かつ</sup>病<sup>たい</sup>の呼吸<sup>いき</sup>を吹懸<sup>ふっか</sup>けられますように、あの女<sup>こ</sup>も弱<sup>じ</sup>り切<sup>き</sup>つておりました  
そうですが。

つい事の起ります少し前でございました、沢井様の裏庭に夕顔の花が咲いた時分だと申しますから、まだ浴衣を着ておりますほどのこと。

急ぎの仕立物がございましたかして、お米が裏庭に向きました部屋で針仕事をしていたのでございます。

まだ明<sup>あかり</sup>も点<sup>つ</sup>けません、晩方、直<sup>じ</sup>きその夕顔の咲いております垣根のわきがあらう格子。手許<sup>てもと</sup>が暗くなりましたので、袖が触りますばかりに、格子の処へ寄つて、縫物をしておりますと、外は見通しの畠<sup>あぜ</sup>道<sup>みち</sup>を馬も百姓も、往<sup>い</sup>つたり、来<sup>き</sup>たりします処、どこで見当をつけましたものか、あの爺<sup>じい</sup>のそのそ嗅<sup>か</sup>ぎつけて参<sup>ま</sup>りましてね、蚊遣<sup>かやり</sup>の煙<sup>けむり</sup>がどこことなく立ち渡ります中を、段々近くへ寄つて来て、格子へつかまって例の通り、鼻の下へつつかい

棒の杖をついて休みながら、ぬつとあのふやけた色づいて薄赤い、てらてらする鼻の尖を突き出して、お米の横顔の処を嗅ぎ出したのでございますと。

もうもう五宿の女郎の、油、白粉、襟垢の香まで嗅いで嗅いで嗅ぎためて、もの匂で重量がついているのでございますもの、夢中だつて氣勢が知れます。

それが貴方、明前へ、突立つてるのじゃあございませぬ、脊伸をしてからが大概人の躰みます位なんで、高慢な、澄した今産れて来て、娑婆の風に吹かれたという顔色で、黙つて、囁をしちやあ、クンクン、クンクン小さな法螺の貝ほどには鳴したのでございませぬ。

麴室の中へ縛られたような何ともいわれぬ厭な気持ちで、しばらくは我慢をもしましたそうな。

お米が気の弱い臆病ものの癖に、ちよつと癩持で、気に障ると直きつむりが疼み出すという風なんですから堪りませぬや。

それでもあの爺の、むかしむかしを存じておりますれば、劫経た私どもでさえ、向へ廻しちやあ気味の悪い、人間には籍のないような爺、目を塞いで逃げますまでも、強いことなんぞ謂われたものではございませぬが、そこはあの女は近頃こちらへ参りまし

たなり、破風口はぶぐちから、Ⅱ無事かⅡの一件いっけんなんぎ、夢にも知りませず、また沢井様などでも誰もそんなことは存ぞんじません。

串じょうだん戯ごにも、つけまわしている様子を、そんな事でも聞かせましたら、夜が寝られぬほど心持を悪くするだろうと思ひますから、私もうつかりしやべりませんでございませう、あの女こはただ汚こい変へんな乞食おやし、親仁おやし、あてにならぬトうらないしや者ものを、愚痴無智ぐだものの者がけだもの獣けだものを拜かむ位いな信心しんをしているとばかり承知じやうちをいたしておりましたので、

(不可いけませんよ、不可いけませんよ、)といつても、ぬツとしてクンクン。

(お前はうるさいね、)と手にしていた針さきの尖さき、指環ゆびわに耳みみを突つ立てながら、ちよいと鼻はな頭しらを突ついたそうあらたでございませう、はい。」  
といつて婆あさんは更あらたまった。

## 十四

「洋犬かめめかけの妾めかけになるだろうと謂いわれるほど、その緋けの袴はかまでなぶられるのを汚けわしがけがらつていた、処女むすめ気けで、思切しきつたことをしたもので、それで胸むねがすつきりしたといつか私わたくしに話わしました

つけ。

氣味を悪がらせまいとは申しませんでしたが、ああこの女は飛んだことをおしだ、外のものとは違つてあのけたい親仁。

蝮まむしの首やけひばしを焼やけ火箸ひばしで突いたほどの祟たたりはあるだろう、と腹おなかじやあ慄然ぞつといたしまして、爺じいはどうしたと聞きましたら、

(いいえ、やつぱりむずむずしてどこかへ行つてしまいました、それツきり、さつぱり見かけないんですよ。)と手柄顔に、お米は胸がすいたように申しました。

なるほど、その後はしばらくこの辺へは立廻りません様子。しばらく影を見ませんから、それじやあそれなりになつたかしら。帳消しにはなるまいと思ひながら、一日まじに私もちつとは気がかりも薄らぎました。

そういたしますと今度の事、飛んでもない、旦那様、五百円紛失の一件で、前ぜん申しました沢井様へ出入の大八百屋が、あるじ自分で罷出まかりましてさ、お金子かねの行方を、一番ひとつ、是非、是非、だまされたと思つて仁右衛門にみておもらいなさいまし、とたつて、勧めたのでございませよ。

どうして礼なんぞ遣やつては腹を立てたたりて祟たたりをします、ただ人助けつかまつに任りますることで、好すき

でお籠こもりをして影も形もない者から聞いて来るのでございます、と悪気のない男ですが、とかく世話好の、何でも四文しもんとのみ込んで差出たがる親仁しんなんで、まめだって申上げたものですから、仕事はなし、新聞は五種いつしうも見えていらつしやる沢井の奥様。

内々その予言者だとかいうことを御存じなり、外に当あたりはつかず、旁かたがた々々それでは、と早速じし爺いをお頼み遊ばすことになりました。

府中の白雲山の庵室へ、佐助がお使者に立ったとやら。一日措おいて沢井様へ参りましたそうでございます。そしてこれはお米から聞いた話ではございません、爺をお招きになりましたことなんぞ、私はちつとも存じないでおりますと、ちようどその卜うらなを立てた日の晩方でございます。

旦那様、貴下あなたが桔梗ききようの花を嗅かいでる処を御覧じやりましたという、吉きちさんという植木屋の女房かみさんでございます。小体こていな暮こして共稼つかいあるきぎ、使歩つかい行あるきやら草取くさやらに雇かわれて参まるのが、稼かせの帰きと見えまして、手て甲こう脚きゃく絆はんで、貴方、鎌かを提たげましたなり、ちよこちよこと寄りまして、

（お婆さん今日は不思議なことがありました。沢井様の草刈に頼たまれて朝疾あさくからあちらへ上あつて働はたらいておりますと、五百円のありかを卜うらなのだといって、仁右衛門爺にさんが、八

時頃に遣つて来て、お金子が紛失したというお居室へ入つて、それから御祈祷がはじまる  
 ということ、手を休めてお庭からその一室の方を見ておりました。何をしたか分かりません、  
 障子襖は閉切つてございましたつけ、ものの小半時経つたと思うと、見ていた私は吃驚  
 して、地震だ地震だ、と極の悪い大声を立てましたわ、何の事はない、お居間の瓦屋根が、  
 波を打つて揺れましたもの、それがまた目まぐるしく大揺れに揺れて、そのままひっそり  
 静まりましたから、縁側の処へ駆けつけて、ちやうど出て参りましたお勢さんという女中  
 に、酷い地震でございましたね、と謂いますとね、げげんな顔をして、へい、と謂つたツ  
 きり、気もないことなんで、奇代で奇代で。とこう申すんでございましょう。」

## 十五

「いかにも私だつて地震があつたとは思いません、その朝は、」  
 と婆さんは振返つて、やや日脚の遠退いた座を立つて、程過ぎて秋の暮方の冷たそうな  
 座蒲団を見遣りながら、

「ねえ、旦那様、あすこに坐つておりましたが、風立ちもいたしません、障子に音もござい

いません、穏かな日なんですもの。

(変じやあないか、女房さん、それはまたどうした訳だろう、)

(それが御祈祷をした仁右衛門爺さんの奇特でございます。沢井様でも誰も地震などと思つた方はないのでして、ただ草を刈つておりました私の目にばかりお居間の揺れるのが見えたのでございます。大方神様がお寄んなすつた験しるしなんでもございませうよ。案の定、お前さん、ちようど祈祷の最中、思い合してみますれば、瓦が揺れたのを見ましたのとおなじ時、次のお座敷で、そのお勢いきほというのに手伝つて、床の間の柱に、友染たすきの襷たすきがけで艶つやぶ雑巾きんをかけていたお米という小間使が、ふつと掛花活かけはなけの下で手を留めて、活けてありました秋草をじつと見ながら、顔を紅べにのようにしたということですよ。何か打合せがあつて、密そつと目をつけていたものでもあると見えます。お米はそのまんま、手が震えて、足がふらついて、わなわなして、急に熱でも出たように、部屋へ下つて臥ふせりましたそうな。お昼過すぎからは早や、お邸中寄ると触ると、ひそひそ話。

高い声では謂われぬことだが、お金子かかねの行先はちやんと分つた。しかし手証を見ぬことだから、膝ひざもと下へ呼び出して、長煙草ながぎせるで打擲ひつぱたいて、吐ぬかさせる数すうではなし、もともと念晴ねんせいしだけのこと、縄なわつき着は邸やしきうち内から出すまいという奥様の思召し、また爺さんの方で

も、神業かみわざで、当人が分つてからが、表沙汰にはしてもらいたくないと、約束をしてかか  
つた祈いのりなんだそうだから僥倖しあわせさ。しかし太り簡ようけんだ、あの細い胴どうなか中なかを、鎖つなで繋つなが  
れる様さまが見たいと、女中達がいっておりました。ほんとうに女形かづらが鬢かづらをつけて出たような  
顔かおつき色いろをしていながら、お米と謂うのは大変なものじゃありませんか、悪党あくだうでもずつ  
と四天よてんで出る方だね、私どもは聞いてさえ五百円ごひゃくえん！とその植木屋かみさんの女房にやぼうが饒舌しゃべりまし  
た饒舌しゃべりました。

旦那様もし貴方、何とお聞き遊ばして下さいますえ。」

判事は右手みぎてのさきで、左の腕かひなを洋服の袖の上からしつかとおさえて、屹きつとお幾いくの顔を見  
た。

「どう思召して下さいます、私は口が利けません、いいわけをするのさえ残念で堪たりませ  
んから碌ろくに返事もしないでおりますと、灯あかりをつけるとして、植吉かみさんの女房にやぼうはあたふた帰つ  
てしまいました。何も悪気のある人ではなし、私とお米との仲を知ってるわけもないので  
ございますから、驚かして慰むにも当りません、お米は何にも知らないにしましても、い  
ただけのことはその日ありましたに違ちがいなのでございますもの。

私は寝られはいたしません。

帰命頂来！ お米が盗んだとしますれば、私はその五百円が紛失したといひまする日に、耳を揃えて頂かされたのでございます。

どんな顔をされまいものでもない、口惜さは口惜し、憎らしさは憎らし、もうもう掴みついて引撈つてやりたいような沢井の家の人の顔を見て、お米に逢いたいと申して出ました。」

## 十六

「それも、行こうか行くまいかと、気を揉んで揉抜いた揚句、どうも堪らなくなりまして思切つて伺いましたので。

心からでございましょう、誰の挨拶もけんもほろろに聞えましたけれども、それはもうお米に疑がかかったなんぞとは、曖にも出しませんで、逢つて帰れ！ と部屋へ通されましてございます。

それでも生命はあつたか、と世を隔てたものにも逢いますような心持。いきなり縋り寄つて、寝ている夜具の袖へ手をかけますと、密と目をあいて私の顔を見ましたつけ、三

日四日が間にめつきりやつれてしまいました、顔を見ますと二人とも声よりは前へ涙なん  
でございます。

物もいわないで、あの女が前髪のこわれた額際まで、天鷲絨の襟を引かぶったきり、ふるえて泣いてるのでございましょう。

ようよう口を利かせますまでには、大概骨が折れた事じやありません。

口説いたり、すかしたり、怨んでみたり、叱つたり、いろいろにいたして訳を聞きますると、申訳をするまでもない、お金子に手もつけはしません、験のある祈をされて、居ても立つてもいられなくなつたことがある。

それは

やつぱりお金子の事で、私は飛んだ心得違いをいたしました、もうどうしましょう。もとよりお金子は数さえ存じませぬ位ですが、心では誠に済まないことをしましたので、神様、仏様にはどんな御罰を蒙るか知れませぬ。

憎らしい鼻の爺は、それはそれは空恐ろしいほど、私の心の内を見抜いていて、日に幾たびとなく枕許へ参つては、

(女、罪のないことは私がよう知っている、じゃが、心に済まぬ事があるう、私を頼め、

助けてやる、と、つけつまわしつ謂うのだそうで。

お米は舌を食い切つても爺の膝を抱くのは、厭いやと冠かぶりをふり廻すと申すこと。それは私も同おんなじ一だけれども、罪のないものが何を恐こわがつて、煩うということがあるものか。濟まないというのの一体どんな事と、すかしても、口説いても、それは問わないで下さいましと、強いていえば震えます、頼むようにすりや泣きますね、調子もかわつて目の色も穩おだやかでないようでございましたが、仕方がございません。で、しおしおその日は帰りまして、一杯になる胸を搔かきやぶ破りたいほど、私が案ずるよりあの女の容体こは一倍で、とうとう貴方、前後が分らず、厭なことを口走りまして、時々、それ巡おまわり査さんが捕まえる、きやつといつてはねお刎起きたり、目を見据えましては、うつとりしていて、ああ、真まっくら暗だこと、牢へ入れられたと申しちゃあ泣くようになりました。そんな容子ようすで、一日々々、このごろでは目もあてられませんように弱りました、ろくろく湯水も通しません。

何か、いろんな恐しいものが寄つて集たかつて苛さいなみますような塩あんばい梅、爺にさえ縋つて頼めば、またお日様が拝まれようと、自分の口からも氣の確たしかな時は申しながら、それは殺されても厭だといひます。

神でも仏でも、尊い手をお延ばし下すつて、早く引上げてやって頂かねば、見る中うちにも

砂一粒ずつ地の下へ崩れてお米は貴方、旦那様。

奈落の底までも落ちて参りますような様子なのでございます。その上意地悪く、鼻めが沢井様へ入り込みますこと、毎日のよう。奥様はその祈の時からすっかり御信心をなすつたそうで、畳の上へも一件の杖をおつかせなさいますお扱い、それでお米の枕許をことごと叩いちやあ、

(気分はどうじゃ、)といたしますそうな。」

十七

お幾は年紀の功だけに、身を震わさなければかりであったが、

「いえ、もう下らないこと、くどくど申上げまして、よくお聞き遊ばして下さいました。

昔ものの口不調法、随分御退屈をなすつたでございましょう。他に相談相手といつてはなし、交番へ届けまして助けて頂きますわけのものではなし、また親類のものでも知己でも、私が話を聞いてくれそうなものには謂いました処で思遣にも何にもなるものじゃあございせん、旦那様が聞いて下さいましたので、私は半分だけ、荷を下しましたよう

に存じます。その御深切だけで、もう沢山なのでございますが、欲には旦那様何とか御判断下さいませわけには参りませんか。

こんな事を申しましてお聞上げ……どころか、もしお気に障りましては恐入りますけれども、一度旦那様をお見上げ申しましてからの、お米の心は私がよく存じております。嚙う言わごとにも今度のその何か済まないことやらも、旦那様に対してお恥かしいことのようにもございませが、はしたな事を。

飛んだことをいう奴だと思し召しますなら、私だけをお叱り下さいまして、何にも知りませんお米をおさげすみ下さいますなえ。

それにつけ彼かにつけましても時ならぬこの辺へ、旦那様のお立寄遊ひつつばしたのを、私はお引合せと思ひますが、飛んだ因縁だとおあきらめ下さいまして、どうぞ一番ひとつ一言でも何とか力になりますよう、おっしゃっては下さいませんか。何しろ煩わづらっておりますので、片時でもほつという呼吸いきをつかせてやりたく存じますが、こうでございませ、旦那様お見かけ申して拝みまする。」と言ことばも切に声も迫おぼつて、両眼に浮べた涙とともに真まは面おもてにあふれたのである。

行懸ゆきがかり、言ことばの端、察するに頼母たのもしき紳士と思ひ、且つ小山を婆ばばが目からその風采ふうさいを

推して、名のある医士であるとしたらしい。

正に大審院に、高き天を頂いて、国家の法を裁すべき判事は、よく堪えてお幾の物語の、一部始終を聞き果てたが、渠は実際、事の本末を、冷かに判ずるよりも、お米が身に関する故をもって、むしろ情において激せざるを得なかつたから、言下に打出して事理を決する答をば、与え得ないで、

「都を少しでも放れると、怪しからん話があるな、婆さん。」とばかり吐息とともにいったのであるが、言外おのずからその明眸の届くべき大審院の椅子の周囲、西北三里以内に、かかる不平を差置くに忍びざる意気があつて露れた。

「どうぞまあ、何は措きましてともかくもう一服遊ばして下さいまし、お茶も冷えてしまいました。決してあの、唯今のことにつきましておねだり申しますのではございません、これからは茶店を預ります商売冥利、精一杯の御馳走、きざ柿でも剥いて差上げましょう。生の栗がございますが、お米が達者でいて今日も遊びに参りましたら、灰に埋んで、あの器用な手で綺麗にこしらえさして上げましょうものを。……どうぞ、唯今お熱いお湯を。旦那様お寒くなりはしませんか。」

今は物思いに沈んで、一秒の間に、婆が長物語りを三たび四たび、つむじ風のごと

く疾く、颯と繰返して、うつかりしていた判事は、心着けられて、フト身に沁む外の方を、欄干越に打見遣った。

黄昏や、早や黄昏は森の中からその色を浴びせかけて、滝を蔽える下道を、黒白に紛るる女の姿、縁の糸に引寄せられけむ、裾も袂も鬢の毛も、夕の風に漂う風情。

## 十八

「おお、あれは。」

「お米でございますよ、あれ、旦那様、お米さん、」と判事にいうやら、女を呼ぶやら。

お幾は段を踏、這らすようにしてずりりと下りて店さきへ駆け出すと、欄干の下を駆け抜けて壁について今、婆さんの前へ衝と来たお米、素足のままで、細帯ばかり、空色の袷に襟のかかった寝衣の形で、寢床を脱出した窈窕した姿、追かけられて逃げる風で、あわただしく越そうとする敷居に爪先を取られて、うつむけさまに倒れかかって、横に流れて蹠跟く処を、

「あッ、」と行って、手を取った。婆さんは背を支えて、どツさり尻をついて膝を折りぎ

まに、お米を内へ抱え込むと、ぼったり諸共に畳の上。

この煽りに、婆さんが座右の火鉢の火の、先刻からじように成果てたのが、真白にぱつと散つて、女の黒髪にも婆さんの袖にもちらちらと懸つたが、直ぐに色も分かず日は暮れたのである。

「お米さん、まあ、」と抱いたまま、はッはッというと、絶ゆげな呼吸づかい、疲果てた身を悶えて、

「厭よう、つかまえられるよう。」

「誰に、誰につかまえられるんだよ。」

「厭ですよ、あれ、巡查さん。」

「何、巡查さんが、」と驚いたが、抱く手の濡れるほど哀れ冷汗びつしよりで、身を揉んで逃げようとするので、さては私だという見境ももうなくなつたと、気がついて悲しくなつた。

「しっかりしておくれ、お米さん、しっかりしておくれよ、ねえ。」

お米はただ切なそうに、ああああというばかりであつたが、急にまた堪え得ぬばかり、  
「堪忍よう、あれ、」と叫んだ。

「堪忍をするから謝罪れの。どこをどう狂い廻つても、私が目から隠れる穴はないぞの。無くなつた金子は今日出たが、汝が罪は消えぬのじゃ。女、さあ、私を頼め、足を頂け、こりやこの杖に縋れ。」と蚊の呻くようなる声して、ぶつぶついうその音調は、一たび口を出でて、唇を垂れ蔽える鼻に入つてやがて他の耳に来るならずや。異様な持主は、その鼻を真俯向けに、長やかなる顔を薄暗がりの中に据え、一道の臭気を放つて、いつか土間に立つてかの杖で土をことごとく鳴らしていた。

「あれ。」打てば響くがごとくお米が身内はわなないた。

堪りかねて婆さんは、鼻に向つて屹と居直つたが、爺がクンクンと鳴して左右に蠢めかしたのを一目見ると、しりごみをして固くお米を抱きながら竦んだ。

「杖に縋つて早や助かれ。女やい、女、金子は盗まいでも、自分の心が汝が身を責殺すのじゃわ、たわけ奴めが、フン。我を頼め、膝を抱け、杖に縋れ、これ、生命が無いぞの。」と洞穴の奥から幽に、呼ぶよう、人間の耳に聞えて、この淫魔ほぎきながら、したたかの狼藉かな。杖を逆に取つて、うつぶしになつて上口に倒れている、お米の衣の裾をハタと打つて、また打つた。

「厭よ、厭よ、厭よう。」と今はと見ゆる悲鳴である。

「この、たわけ奴の。」

段の上ですつくと立つて、名家の彫像のごとく、目まじろきもしないで、一場の光景を見詰めていた黒き衣、白き面、清癯鶴に似たる判事は、衝と下りて、ずつと寄つて、お米の枕頭に座を占めた。

威厳犯すべからざるものある小山の姿を、しよぼけた目でじつと見ると、予言者の鼻は居所をかえて一足退つた、鼻と共に進退して、その杖の引込んだことはいうまでもなかるう。

目もくれず判事は静にお米の肩に手を載せた。

軽くおさえて、しばらくして、

「謂うことが分るか、姉さん、分るかい、お前さんはね、紛失したというその五百円を盗みも、見もしないが、欲しいと思つたんだらうね。可し、欲しいと思つた。それは深切なこの婆さんが、金子を頂かされたのを見て、あの金子が自分のものなら、老人のものにしたいと、……そうだ。そこを見込まれたのだ。何、妙なものに出会して気を痛めたに違いなからう。むむ、思つたばかり罪はないよ、たとい、不思議なものも咎があつても、私が申請しよう。さあ、しつかりとつかまれ。私が楯になつて怪いもの目から隠してや

ろう。ずつと寄れ、さあこの身体からだにつかまってその動悸どうきを鎮めるが可い。放すな。」と爽さわやかにいった言ことばにつれ、声につれ、お米は震いつくばかり、人目に消えよと取継とつた。

「婆さん、明あかりを。」

飛上るようにして、やがてお幾が捧げ出した灯ともの影かげに、と見れば、予言者はくるりと背う後向しろになつて、耳を傾けて、真しんちゆう鍬くわの耳搔みみかきを悠々とつかいながら、判事ことばの言を聞澄きして  
いるかのごとくであつた。

「安心しな、姉さん、心に罪があつても大事はない。私が許す、小山由之助だ、大審院の判事が許して、その証拠ぬすみに、盗ぬすをしたいと思いますと思つたお前と一所になろう。婆さん、媒人なこうどは頼んだよ。」

迷信の深い小山夫人は、その後永く鳥獸の肉と茶ちや断だちをして、判事の無事を祈いのっている。蓋けだし当時、夫婦を呪詛じゆそするという捨台辞すてぜりふを残して、我言わがかくのごとく違たがわじと、杖をもつて土を打つこと三たびにして、薄うすづき月の十日の宵の、十二社の池の周囲を弓なりに、飛ぶかとばかり走り去つた、予言者の鼻の行方がいまだに分らないからのである。

明治三十四（一九〇一）年一月





# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成2」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年4月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第六卷」岩波書店

1941（昭和16）年11月10日発行

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2007年2月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 政談十二社

## 泉鏡花

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>